

文化、言語、文学

担当 博多かおる（本学大学院総合国際学研究院 准教授）

2010年9月
(2011年7月補訂)

以下の図書は、各分野の先生方からご協力をいただき、基本的に文庫・新書から選びました。関連する単行本をあげておきたい箇所には、★に続けて著者名、書名等を挙げました。なお、このリストは今後、先生方のご協力を得て補完されていく予定です。現在の状態に偏りがあることをご了承ください。

(編集部注：東京外国語大学附属図書館に所蔵がある図書は、書名に下線があります。PDF版では東京外国語大学 図書館OPACにリンクしています。(所蔵調査は2014年2月現在))

絵画

◆ 絵画史、絵画論

- ・高階秀爾『[近代絵画史（上）（下）](#)』 中公新書 1975年
ゴヤからモンドリアンまでの近代西洋絵画の歴史を、当時の社会的背景や美学思想との関連も視野にいれながら詳しく、分かりやすく説いた著作。同じ著者の本に『[20世紀美術](#)』、『[ピカソ 剽窃の論理](#)』、『[世紀末芸術](#)』（以上、ちくま学芸文庫）、『[日本近代美術史論](#)』（講談社学術文庫）等もある。
- ・本江邦夫『[中・高校生のための 現代美術入門 ●▲■の美しさって何？](#)』 平凡社ライブラリー 2003年
カンディンスキー、モンドリアン、現代アメリカの画家ら、20世紀の絵画作品を読み解くための鍵を手に入れたい。
- ・ケネス・クラーク『[絵画の見かた](#)』 高階秀爾訳 白水Uブックス 2003年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）
美術批評の大家が西洋絵画史の名作と呼ばれる作品を16点選び、その作品の歴史的意義、作家の精神、作品の美的経験を語ったエッセイ。
- ・山梨俊夫『[現代絵画入門](#)』 中公新書 1999年
現実世界を再現することをやめた現代絵画はまるで見るものを排除するほど難解であるかのように思われる。しかし、絵画が何を求めるようになったのか、画家が何を欲望するようになったのかを理解すれば、現代絵画は期待以上のものを語りかけてくる。本書はそのための導きの書である。
- ・谷川 渥『[鏡と皮膚—芸術のミュトロギア](#)』 ちくま学芸文庫 1994年（編集部注：図書

館の所蔵は単行本)

古今の絵画作品から神話を読み直し、鏡と皮膚の物語を解く新鮮な芸術論。

◆ 絵画について語る、絵画をみる

- ・ディドロ『[絵画について](#)』 佐々木健一訳 岩波文庫 2005年
18世紀の啓蒙哲学者ディドロがデッサン・色彩・明暗法・構成などを論じた興味深い論考。
- ・喜安 朗編『[ドーミエ風刺画の世界](#)』 岩波文庫 2002年
政治・社会を諷刺するリトグラフィーで移りゆく19世紀パリを捉えたドーミエの作品109点を読み解く。
- ・ボードレール『ボードレール批評<1>[美術批評](#) (1)』 阿部良雄訳 ちくま学芸文庫 1999年 (編集部注: 図書館の所蔵は単行本)
詩のみでなく重要な美術批評を残したボードレールの「サロン」評等を収める。

写真

- ・ヴァルター・ベンヤミン『[図説 写真小史](#)』 久保哲司編訳 ちくま学芸文庫 1998年
初期の写真から1930年代の写真までを論じたエッセイと写真を収める。複製芸術時代において、芸術から「いま、ここ」の 아우ラ が失われる—そこにおける写真とは何なのか？
- ・ジョン・バージャー『[見るということ](#)』 飯沢耕太郎監修 笠原智子訳 ちくま学芸文庫 2005年
写真の登場によって、人間の膨大なイメージに取り巻かれることとなった。そして、「見るということ」はどう変わったのか？ 具体的な写真作品を論じつつ、生の経験、歴史・文化を問い直す。
- ・赤瀬川原平『[超芸術トマソン](#)』 ちくま文庫 1987年
都市の中には得体のしれないものが潜んでいる。いわば都市の無意識のようなもの。誰にでもトマソンは見つけられる。ところでトマソンって何？
- ・港 千尋『[群衆論](#)』 ちくま学芸文庫 2002年
20世紀は群衆の時代だ、とギュスターヴ・ローは言った。その群衆の映像を網羅的に分析することで、新たな写真史を提起した一冊。
- ・伊藤俊治『[20世紀写真史](#)』 ちくま学芸文庫 1992年
19世紀半ばにおける写真の誕生から現代までの写真史を、時代の精神性や社会上状況をふまえて論じた書。

以下も参照したい：

- ★ロラン・バルト『[明るい部屋—写真についての覚書](#)』 花輪 光訳 みすず書房 1985年
- ★スーザン・ソントグ『[写真論](#)』 近藤耕人訳 晶文社 1979年

演劇

- ★ピーター・ブルック『[なにもない空間](#)』 高橋康也、喜志哲雄訳 晶文選書 1971年
20世紀の重要な演出家による、演劇についての重要な一冊。

舞踏

- ・ポール・ヴァレリー『[エウパリノス・魂と舞踏、樹についての対話](#)』 岩波文庫 2008年
建築、音楽、舞踊などにまつわる、ヴァレリーの美しい三篇の対話。
- ★ゴーチエ、ヴァレリー、マラルメ『[舞踊評論](#)』 井村実名子、松浦寿輝、渡邊守章訳 新書館 1994年

音楽

- ・芥川也寸志『[音楽の基礎](#)』 岩波新書 1971年
まさに音楽の基礎にある音と沈黙の関係から、和声・調性・対位法など音楽の主要な概念や手法まで、さまざまな音楽に目を向けつつ語ってくれる、わかりやすく充実した一冊。
- ・小泉文夫『[音楽の根源にあるもの](#)』 平凡社ライブラリー 1994年
日本のわらべうた、民謡から、北アメリカ、アジア各地の歌謡・民族音楽まで、世界にひびく音、「自らうたったり、鳴らしたりする」を考察する。音楽と人間のかかわりを考え直す。
- ・戸口幸策『[オペラの誕生](#)』 平凡社ライブラリー 2006年
地域、都市ごとに、文化的・歴史的な脈をふまえてオペラの歴史を丁寧に追った書。作品や形式等についても触れられており、わかりやすい。
- ・岡田暁生『[西洋音楽史—「クラシック」の黄昏](#)』 中公新書 2005年
独特で軽快な語り口で、一八世紀後半から二〇世紀前半にいたる西洋音楽、「クラシック音楽」の歴史を語りその前後を考える。同じ著者の本に、時代と社会の産物としてオペラを捉えた『[オペラの運命—十九世紀を魅了した「一夜の夢」](#)』（中公新書 2001年）もある。
- ・マルセルビッチ、ボンフィス『[フーガ](#)』 余田安広訳 文庫クセジュ 1986年
多声音楽の基礎にある対位法とは何かわかりやすく教えてくれる。バッハ以降も現代に至るまで生きているフーガの可能性に迫る。

- ・オリヴィエ・アラン『[和声の歴史](#)』 永富正之、二宮正之訳 文庫クセジュ 1969年
和声から音楽をたどってみよう。音楽史がよりくっきりと見えてくる。

- ・小沼純一編『[武満徹 エッセイ選一言葉の海へ](#)』 ちくま学芸文庫 2008年
作曲家である著者が、音楽や人間とのエピソードを語る。世界各地の音楽・文化・人間と多角的に向き合うってどういうことだろう？ この本は、「私たちの耳はきこえているか」という、著者の別の本のタイトルにもなっている問いに立ち返らせてくれる。同じシリーズの『[武満徹 対談選一仕事の夢 夢の仕事](#)』も。

- ・吉田 進『[ラ・マルセイエーズ物語—国歌の成立と変容](#)』 中公新書 1994年
フランス革命のある一夜に作られた歌は、いかなる経緯を辿って国歌になったのか？ レゲエ・バージョンに至るまで、どのように変奏されてきたのか？ 問われる国家や革命、その中で、ちょっとしたテンポや解釈によってがらりと役割を変える音楽の力。

- ・樋口隆一『[バッハ](#)』（カラー版作曲家の生涯） 新潮文庫 1985年
- ・平野 昭『[ベートーヴェン](#)』（カラー版作曲家の生涯） 新潮文庫 1985年
- ・遠山 一行『[ショパン](#)』（カラー版作曲家の生涯） 新潮文庫 1988年
- ・三宅 幸夫『[ブラームス](#)』（カラー版作曲家の生涯） 新潮文庫 1986年
カラー写真とともに作曲家と作品を紹介する入門書。

- ・磯山 雅『[J・S・バッハ](#)』 講談社現代新書 1990年
バッハに関する資料を多く盛り込み、作曲の技法、演奏批評、名曲・名盤案内まで備えた入門書。

- ・吉田秀和『[モーツァルト](#)』 講談社学術文庫 1990年
日本の音楽評論家として多くの反響をうながしてきた著者によるモーツァルト論。モーツァルトの音楽とは何か、音楽を語るということはどんなことか？

- ・『[新編 ベートーヴェンの手紙\(上\)\(下\)](#)』 小松雄一郎編訳 岩波文庫 1982年
ベートーヴェンの手紙を収録。作曲家の人生と時代を彼自身の言葉から想像させてくれる貴重なテキスト。

- ・ロマン・ロラン『[ベートーヴェンの生涯](#)』 岩波文庫 1965年
作家ロマン・ロランが自分の中に響くベートーヴェンを語り、多くの人に感動を与えてきた。

- ・シューマン『[音楽と音楽家](#)』 吉田秀和訳 岩波文庫 1958年
ドイツロマン派の作曲家であるシューマンは優れた批評家でもあった。ここにはショパン、ベルリオーズ、シューベルト、ベートーヴェン、ブラームスなどを論じた文章が集められている。同時の音楽状況を生き生きと伝えてくれると共に、シューマンの才気に触れさせてくれる書。

- ★若林忠宏『[世界の民族音楽辞典](#)』 東京堂出版 2005年
民族音楽を知るためのさまざまな要素——楽器、演奏法、流派、音階、旋法など——が詰まった一冊。

- ★水野信男他編『[アラブの音文化](#)』 スタイルノート 2010年
耳のみで鑑賞する音楽を脱して、他の音や身体、社会、政治、歴史、宗教、言語などとの関係の中で音楽を捉える一古典音楽から、儀礼の音楽、ポップ音楽やダンスまで。

- ★水野信男『[中東・北アフリカの音を聴く—民族音楽学者のフィールドノート](#)』 スタイルノート 2008年
イランからポルトガルまで、フィールドワークを行ってきた民族音楽学者が中東・北アフリカなどを音の視点から綴ったエッセイ。

- ★ボボノフ『新版 ロシア民族音楽物語』 広瀬信雄訳 新読書社 2000年
ロシア音楽、そこで使われる楽器はどのように生まれ、奏でられ、何を伝えてきたのか。
(編集部注：図書館の所蔵は、[初版\(1995年, 単行本\)](#))

映画

- ・中条省平『[フランス映画史の誘惑](#)』 集英社新書 2003年
フランスで生まれた映画の歴史を、わかりやすく分析しつつ簡潔に紹介してくれる。観たい映画が増えるはず。

- ・蓮實重彦『[映像の詩学](#)』 ちくま学芸文庫 2002年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
映画批評に新しい地平を開いた蓮實重彦が、フォード、ルノワール、ゴダール等を論じる。

- ★ドゥルーズ『[シネマ1 運動イメージ](#)』 財津 理、齋藤 範訳 叢書・ユニベルシタス 法政大学出版局 2008年
- ★ドゥルーズ『[シネマ2 時間イメージ](#)』 宇野邦一他訳 叢書・ユニベルシタス 法政大学出版局 2006年
さまざまな映画作品を分析し、イメージ、記号について考えながら、「運動」「時間」をめぐる哲学概念を塗り替える試み。

- ★J. オーモン、M. マリー、A. ベルガラ、M. ヴェルネ『[映画理論講義—映像の理解と探究のために](#)』 武田 潔訳 勁草書房 2000年
映画理論に関して包括的・体系的に記述された書物としては、日本語で読むことのできるおそらく唯一のものといってよい。初心者にとって必ずしも平易ではないかもしれないが、映画研究に本格的に関心をもっている人にとっては必読。

★ルイス ジアネッティ『[映画技法のリテラシー 〈1〉 映像の法則](#)』、『[映画技法のリテラシー 〈2〉 物語とクリティック](#)』 堤 和子、堤 龍一郎、増田珠子訳 フィルムアート社 2004年

映像表現、映画研究にかかわる重要な軸を章ごとに設定。とりあげている映画の具体例が新しいことも長所のひとつ。映画の技術的・理論的側面の知識により、映画の見方が決定的に変わってくるだろう。普通に読んでいて、非常に面白い本。映画研究に関心を持った人が最初に手にする本として、次にあげる『フィルム・アート』とともに勧められる。

★デヴィッド ボードウェル、クリスティン トンプソン『[フィルム・アート ー映画芸術入門](#)』藤木秀朗、笹川慶子、飯岡詩朗、板倉史明、北野圭介、北村 洋訳 名古屋大学出版会 2007年

映画研究にかかわるさまざまなトピックを、理論的側面と新しい映画の豊富な具体例とともに記述。初心者であっても、ほぼ無理なく読める。

★スティーブン・D. キャッツ『映画監督術 SHOT BY SHOT』、『映画監督術 〈2〉 cinematic motion』津谷祐司訳 フィルムアート社 1996年

基本的には、映画制作にかかわる人のための手引書的な性格をもっているが、ここで紹介されている映画制作における技術的側面の基本事項は、映画を見る人・研究する人にとっても必須の知識である。そういった性格の本としては、初心者にも入りやすい書物。

★ジェームズ・モナコ『映画の教科書—どのように映画を読むか』 岩本憲児訳 フィルムアート社 1983年

★James Monaco, *How to Read a Film: Movies, Media, and Beyond: Art, Technology, Language, History, Theory*. Oxford Univ. Pr.; 4 Rev. Exp., 2009.

映画の理論的・社会的・美学的側面をコンパクトな書物の内にまとめている点で、初心者にとって入りやすい本。ただし、日本語訳はかなり古い版に基づいており、オリジナルの英語版（現在第4版）を強くお勧めする。

・四方田犬彦『日本映画史 100年』 集英社新書

日本映画の歴史をコンパクトに概観するためにはおそらく最も適していると思われる。

建築

★熊倉洋介他『[カラー版 西洋建築様式史](#)』 美術出版社 2010年

古代オリエントから、古代ギリシャ・ローマ建築を経て、ロマネスク、ゴシック、ルネ

サンス、バロック、18 世紀、19 世紀、20 世紀の建築を紹介していくこの書は、入門書ではあるが、図版が多くわかりやすい。

- ・藤森照信『[日本の近代建築（上）（下）](#)』 岩波新書 1993 年
開国による西洋館の流入、明治における近代建築の発展から大正をへて、昭和のアールヌーヴォーからモダニズムへ、やがて戦争へと、建築の流れを追った通史。
- ・酒井 健『[ゴシックとは何か—大聖堂の精神史](#)』 ちくま学芸文庫 2006年
ゴシック建築を、様式のみでなく精神的土壌から読み解く書。
- ・レム・コールハース『[錯乱のニューヨーク](#)』 鈴木圭介訳 ちくま学芸文庫 1999 年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）
ニューヨーク—神話を実現し、欲望をつめこんだ過密文化の都市。図版とともにこの町の成り立ちと可能性・限界を描いた、世界的建築家による必読書。
- ・原 広司『[空間—機能から様相へ](#)』 岩波現代文庫 2007 年
現代の「均質空間」はどのように成り立ち、21 世紀はどこへ向かうのか。建築家である著者が、工学、哲学、現象学、仏教、集落観察などをもとに今後の「様相」の時代を予見する。
- ★ル・コルビュジェ『[建築をめざして](#)』 吉坂隆正訳 SD選書 鹿島出版会 1992 年（編集部注：図書館の所蔵は初版（1967 年））
1923 年に発表され、「住宅は住むための機械だ」というあまりにも有名な文句を含むこの本は、新しい都市・建築の時代を告げ、今なお建築を考える上での必読書。
- ★R・ヴェンチューリ『[建築の多様性と対立性](#)』 伊藤公文訳 SD選書 鹿島出版会 1992 年（編集部注：図書館の所蔵は第 2 刷（1983 年））

「意味の明快さ」を求めた近代建築運動の純粹主義に対し、「意味の豊かさ」をはらむ多様性と対立性を唱えたヴェンチューリによる、『[ラスベガス](#)』と並ぶ重要な書。

料理・美食

- ・マーヴィン・ハリス『[食と文化の謎](#)』 板橋作美訳 岩波現代文庫 1988 年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）
地域によって、人はなぜあるものを食べ、別のところでは食べないのか？ 不思議の多い人類の食を、エコロジカルな視点を交えて切る。
- ・西川 恵『[エリゼ宮の食卓—その饗宴と美食外交](#)』 新潮文庫 1996 年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）
美食と外交の関係を、実際の例（メニュー）を挙げながら分析する。
- ・ブリア・サヴァラン『[美味礼讃（上）（下）](#)』 関根秀雄、戸部松実訳 岩波文庫 1967

年

食、ガストロノミーについて語るにあたって素通りできない一冊。原題の一部に『味覚の生理学』という語を含んでいるこの本は、生理学ばやりだった 19 世紀のフランスで書かれた。

★『[世界の食文化 全 20 巻+別巻](#)』 農山漁村文化協会 2003/2009 年

各地の料理を旅しよう。その背景にある風土や社会、歴史を垣間みよう。

1. 韓国 2. 中国 3. モンゴル 4. ベトナム・カンボジア・ラオス・ミャンマー 5. タイ 6. インドネシア 7. オーストラリア・ニュージーランド 8. インド 9. トルコ 10. アラブ 11. アフリカ 12. アメリカ 13. 中南米 14. スペイン 15. イタリア 16. フランス 17. イギリス 18. ドイツ 19. ロシア 20. 極北

★北山晴一『[美食の社会史](#)』 朝日選書 朝日新聞社 1991 年

料理の歴史、「美食」という概念、レストラン、レストランのはじまり、民衆の食べ物、残飯の転売、など、フランスの食の歴史について知るためにはぜひ読みたい本。

★レベッカ・L・スパング『[レストランの誕生—パリと現代グルメ文化](#)』 小林正己訳 青土社 2001 年

フランス大革命直後に現れたレストランから当時の思想や都市を読み解く。

★アントニー・ローリー『[美食の歴史](#)』 富樫櫻子訳 創元社 1996 年

香辛料、料理書、調理設備、料理スタッフの地位、道具、家庭と料理など、美食文化の鍵を握るトピックを紹介する。

★沼野恭子『[ロシア文学の食卓](#)』 NHKブックス 2009 年

ロシア文学を通して浮かび上がる食—誰もが知っているキャビアやボルシチ、ピロシキ、キャビアから始まって必ずしも日本で知られていない食べ物まで—それらを通じて、ロシアの諸地域や宗教、精神、時代などをのぞかせてくれる興味深い書物。

服飾・装飾

・鷺田清一『[モードの迷宮](#)』 ちくま学芸文庫 1996 年

・鷺田清一『ちぐはぐな身体—ファッションって何?』 ちくま文庫 2005 年
身体と服の関係とは? ファッションの複雑な役割を考えてみよう。

★北山晴一『[おしゃれの社会史](#)』 朝日選書 朝日新聞社 1991 年

汚物都市パリにおける身体と衛生、衣生活革命、古着屋の伝統、既製服のはじまり、デパートが衣服をどう変えたか、記号としてのモード、その構造、視線の役割など、近代の服飾を考えるために不可欠な要素を示してくれる書。

★フィリップ・ペロー『[衣服のアルケオロジー](#)』 大矢タカヤス訳 文化出版局 1985 年

「本書は主に 19 世紀フランスのブルジョワジーの服装を扱い、帽子から外套・下着・靴下・靴に至るまであらゆる衣服の起源と変遷を示し、それらの持つ記号としての機能、というより

記号でしかありえない実態を迫力ある語り口で読者に納得させてしまうのである。」（「訳者あとがき」より） 図版もあり、充実した一冊。

★パスカル・セッセ『服飾の歴史—その神秘と科学』 日向あき子訳 美術選書 美術出版社 1964年

服飾の変遷を追うというよりは、時には奇妙な衣装をまとい「着飾る人間、この不思議な生き物」を考察する。

- ・オーギュスト・ラシネ『[民族衣装](#)』 マールカラー文庫 1994年
- ・オーギュスト・ラシネ『[続民族衣装](#)』 マールカラー文庫 2009年
各国の民族衣装を、その時代や役割、構造とともにイラスト入りで紹介。
『[世界装飾図](#)』（マールカラー文庫 ヨーロッパ、ギリシャ、エジプトの装飾図を解説）もある。

- ・H・ドイメツチュ『[文様博物館](#)』 マールカラー文庫 1995年
古代エジプトから18世紀のヨーロッパに至る、絵画、彫刻、建築、モザイク、七宝、ステンドグラス、刺繍、象眼などの装飾文様を追う。

言語、ことば

- ・サピア『[言語](#)』 安藤貞雄訳 岩波文庫 1998年 (Edward SAPIR: [Language](#), 1921.)
アメリカ構造言語学の古典の一冊。アメリカ原住民言語の分析が基本にあるため、ヨーロッパ言語学より偏りが少ないかもしれない。
- ・イエスペルセン『[文法の原理 \(上\) \(中\) \(下\)](#)』 安藤貞雄訳 岩波文庫 2006年 (Otto JESPERSEN: [The Philosophy of Grammar](#), 1924.)
ヨーロッパ諸語の文法が比較されている。イエスペルセンは7巻の英文法を書いているデンマークの英語学者。同著者の『[言語](#)』 ([Language](#), 1922) もある。
- ・ウォーフ『[言語・思考・現実](#)』 池上嘉彦訳 講談社学術文庫 1993年 (Benjamin Lee WHORF: [Language, Thought and Reality: Selected Writings](#), 1956.) (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
思考は言語の鋳型を越えることが出来るか。言語と現実認識との関係が問題になる。ウォーフはサピアの弟子。
- ・ヴィトゲンシュタイン『[論理哲学論考](#)』 野矢茂樹訳 岩波文庫 2003年 (Ludwig WITTGENSTEIN: [Tractatus logico-philosophicus](#), 1922, 1933.)
論理についての本だが言語と論理との関係を考えさせられる。
- ・カッシーラー『[シンボル形式の哲学 第一巻言語](#)』 生松敬三、木田 元訳 岩波文庫 1989年 (Ernst CASSIRER: [Die Philosophie der symbolischen Formen, Bd. I. Die Sprache](#), 1923.)
広義のシンボル全体（これは広い）の中で言語は本質的な位置を占める。第二巻神話、

三 - 四巻認識まで読み進むと更に深まる。

- ・ピアジェ『[構造主義](#)』 滝沢武久、佐々木明訳 文庫クセジュ 1970年 (Jean PIAGET: *Le Structuralisme*, 1968.)
数学、物理学、生物学、心理学、言語学、社会科学における重要概念「構造」について書かれている。特に第5章：言語学。
- ・山鳥 重『ヒトはなぜことばを使えるか』 講談社現代新書 1998年
神経心理学者である著者による、言語と心の生物学的な基盤の理解への導入。
- ・正高信男『[子どもはことばをからだで覚える](#)』 中公新書 2001年
言語は直接には大脳中枢に依存するが、脳は人間の身体全体とつながっている。比較行動学学者による興味深い本。
- ・川島隆太、安達忠夫『[脳と音読](#)』 講談社現代新書 2004年
脳科学専門家と独・北欧文学者による対話形式の書。音読の役割がわかる。

文学史、概説、文学批評、作家論など

「何を讀んだらよいのか？」探し、読み、答えは見つけるのは自分だとしても、それを考える手助けをしてくれる本がいろいろとある。ここではいくつかの文庫版を紹介する。世界の文学をどこからめぐるか、もちろん順序はないので、以下順不同。

◆岩波文庫から出ている「文学案内」のシリーズ

- ・高津春繁・斎藤忍随『[ギリシア・ローマ古典文学案内](#)』 岩波文庫 1963年
ギリシア・ローマの古典は、ヨーロッパ文明を理解するために避けて通れない。だがそのための義務と考えるには、この案内をもとに出会える作品はあまりに魅力的。
- ・渡辺一夫・鈴木力衛『[増補 フランス文学案内](#)』 岩波文庫 1990年
人間についての考察に満ちたフランス文学を、優れた人文学者たちが語る、味わい深いフランス文学紹介。中世から20世紀までのフランスの名作が紹介されている。
- ・手塚富雄・神品芳夫『[増補 ドイツ文学案内](#)』 岩波文庫 1993年
ドイツ文学はもちろん奥が深く、周辺や他の地域の文学にも影響を与えている。それを支える精神についても理解を深めるための手引き。
- ・藤沼貴・小野理子・安岡治子『[新版 ロシア文学案内](#)』 岩波文庫 2000年
ロシア精神はどのように作られ、その上にいかなる文学が花咲いたのか？ この書を一つの入り口に、探っていきたい。
- ・串田孫一『[ギリシア神話](#)』 ちくま文庫 1990年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)

ギリシャ神話に出てくるゼウスをはじめ人間くさい神々。彼らが繰り広げるドラマを、わかりやすく、魅力的な語り口で語ってくれる。人生論、哲学書、山岳文学、画集、小説、翻訳とさまざまな仕事を手がけた著者を知る一つの入り口としても。

◆文庫クセジュから出ている「文学史」のシリーズ

- ・ピエール・グリマル『[ラテン文学史](#)』 藤井 昇、松原秀一訳 文庫クセジュ 1966年
社会・政治・言語のあり方をふまえてラテン文学作品を紹介してくれる。同じ著者がローマ時代の愛の諸相を同じく多方面から描いた『[ローマの愛](#)』も興味深い。
- ・ジャン・カン『[スペイン文学史](#)』 会田 由訳 文庫クセジュ 1956年
スペイン文学の主要な著作を紹介し、カタルーニャ語による文学にも一章をあてて、ヨーロッパ文学におけるスペイン文学の位置を考える。
- ・ジャック・ジョゼ『[ラテンアメリカ文学史](#)』 高見英一、鼓 直訳 文庫クセジュ 1975年
ボルヘス、ガルシア＝マルケスをはじめ、世界の文学を変えたラテンアメリカの作家・詩人らの精神的軌跡を追う。
- ・ルネ・ラルー『[英文学史](#)』 吉田健一訳 文庫クセジュ 1952年
7章にわたって時代ごとに英文学の発展を追っていく。

◆その他、文庫による各国文学案内

- ・白川 静『[中国の古代文学 \(一\) \(二\)](#)』 中公文庫 1976年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
『[漢字一生涯立ちとその背景](#)』の著者、白川 静が紹介する中国の古代文学。
中国文学の原点である詩経、楚辞から、古代歌謡、司馬遷、陶淵明・謝靈運らへの文学活動へと、中国文学の流れをたどる。
同じ著者に『[中国の神話](#)』(中公文庫)もある。(編集部注：図書館の所蔵は単行本)

文庫ではないが、アフリカ文学・言語文化について、次のような書物がある。

- ★宮本正興『[文化の解放と対話—アフリカ地域研究への言語文化論的アプローチ](#)』 第三書館 2002年
- ★宮本正興『[文学から見たアフリカ](#)』 第三書館 1989年

◆何を、どう読むのか—読書論、作家論

- ・吉本隆明『[読書の方法](#)』 光文社文庫 2007年 (知恵の森文庫版 2006年)
詩人であり思想家である著者が、読むことについて語る。書物のリストあり、対談あり。
#吉本隆明『定本 言語にとって美とは何か』(角川ソフィア文庫 2001年)は言語、芸術、文学とは何かを問う、吉本隆明の代表作の一つ。

- ・澁澤龍彦『[偏愛的作家論](#)』 河出文庫 1997年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
鬼才、澁澤が石川淳、三島由紀夫など24人の日本作家を論ずる。自由にして真摯な、読ませる作家論。

◆詩のテキストを読む

- ・茨木のり子『[詩のころを読む](#)』 岩波ジュニア新書 1979年 (編集部注：図書館の所蔵は改版(2009年))
詩を書き、読み続けてきた著者によって書かれたこの本の文章は、皆どこかで目にしたかもしれないが、今なお新鮮。

◆児童文学を読む

- ・瀬田貞二『[幼い子の文学](#)』 中公新書 1980年
物語、詩、童謡など、子供が会える言葉について語る。
- ★宮川健郎『[現代児童文学の語るもの](#)』 NHKブックス 1996年
児童文学革新の40年を振り返り、その波がもたらしたものを問い直す。

- ・吉本隆明『[詩の力](#)』 新潮文庫 2009年
現代詩とは何かから語り始め、俳句や短歌、歌詞まで、詩のテキストを解説する評論集。詩の形式、音、レトリックなど、詩を読み解く前提となるさまざまな概念をふまえた上で、やさしい口調で数々の詩人の世界に誘ってくれる。

◆文学テキストをどう読むか—文学批評の方へ

- ・廣野由美子『[批評理論入門—『フランケンシュタイン』解剖講義](#)』 中公新書 2005年
この書は、小説というものはどんなテクニックを使って書かれるのかを説明(「小説技法篇」)した後、批評理論を解説していく(批評理論篇)。小説を分析しようと思う時におさえておくべき概念、作品分析の方法を紹介しながら、19世紀初頭に書かれた小説『フランケンシュタイン』のテキストを読んでいく。

◇ 文学批評入門書としては、他に単行本で

- ・テリー・イーグルトン『[新版 現代批評理論への招待](#)』 大橋洋一訳 岩波書店 1997年
などが挙げられてきたが、最近のものとしては
- ・ジョナサン・カラー『[1冊でわかる 文学理論](#)』 荒木映子、富山太佳夫訳 岩波書店2003年
などがある。
- ・前田 愛『[都市空間のなかの文学](#)』 ちくま学芸文庫 1992年

日本文学を読む姿勢は、国外の批評理論の輸入によって大きく変わった。文学テキストにどのように切り込むのか、漱石らの小説を実際に読み解いて近代文学研究に新たな地平を開いた『[文学テキスト入門](#)』(ちくま学芸文庫 1993年)と並ぶ前田愛の代表的著書。この書は、都市と文学という主題のもとに、日本近代文学を読んでゆく。読後、読間に、この書が

参照している他の書物をひもときたい——ロラン・バルトの『[エッフェル塔](#)』『[ラシーヌ論](#)』、ベンヤミン『[パリー19世紀の首都](#)』、ミッシェル・フーコー『[監獄の誕生](#)』、ジョルジュ・プーレ『[円環の変貌](#)』、ガストン・バシュラール『[空間の詩学](#)』、O・F・ボルノウの『[人間と空間](#)』など。

・アウエルバッハ『[ミメシス \(上\) \(下\)](#)』 篠田一士、川村二郎訳 ちくま学芸文庫 1994年

ホメロス『[オデュッセイア](#)』から、武勲詩、宮廷物語、ダンテ『[神曲](#)』、ラブレー、モンテーニュ、シェイクスピア、セルバンテス、フランス古典主義、18世紀フランス文学（アベ・プレヴォー、ヴォルテール）、ゲーテとシラー、リアリズム文学（バルザック、スタンダール、フローベール）、ゾラやドストエフスキーを経てヴァージニア・ウルフ（『[灯台へ](#)』）まで、ヨーロッパの文学作品を対象に文体を分析し、ミメシス（現実模写・描写）の変遷に迫った古典的名作。

・ジョルジュ・ルカーチ『[小説の理論](#)』 原田義人訳 ちくま学芸文庫 1994年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）

1920年に世に出たこの著は、ハンガリー出身の哲学者・政治家・マルクス主義者として知られるジョルジュ・ルカーチ（1885~1971）の小説論。ルカーチには、他にも具体的な優れた作家・作品論がある。

・M・バフチン『[小説の言葉](#)』 伊東一郎訳 平凡社ライブラリー 1996年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）

小説の言語を、近代以降の芸術の中心にあるものと捉え、そのポリフォニック（多声的）な性質を論じた本書は、文学研究に大きな影響を与えた。

・M・バフチン『[ドストエフスキーの詩学](#)』 望月哲男、鈴木淳一訳 ちくま学芸文庫 1995年も読みたい。

・トドロフ『[幻想文学論序説](#)』 三好郁朗訳 創元ライブラリー 東京創元社 1999年

上記フライの方法を恣意的なものとし、ジャンル理論を発展させたのがトドロフであり、1970年に発表された本書はジャンル理論の古典とも言える。「幻想文学」の定義に関して、今なお参照されつづける書。

・ウラジーミル・プロップ『[魔法昔話の研究—口承文芸学とは何か](#)』 齋藤君子訳 講談社学芸文庫 2009年

プロップが民間伝承の構造と歴史的現実の関係を説いた書。

★ウラジーミル・プロップ『[昔話の形態学](#)』 北岡誠司、福田美智代訳 書肆風の薔薇 1987年
魔法昔話が、主に31の機能から作られていること、また、分類可能な登場人物の機能によって組み立てられていることを示した、構造分析の名著。

★『[フロイト全集〈17〉1919 - 1922年—不気味なもの、快原理の彼岸、集団心理学](#)』 須藤訓任、藤野 寛訳 岩波書店 2006年

20世紀には、フロイトの影響のもとに、精神分析批評も重要な流れを作った。その源にあ

るフロイトのテキストの一つ「不気味なもの」を含むフロイトの著作集。

★ノースロップ・フライ『[批評の解剖](#)』 海老根宏訳 叢書・ユニベルシタス 法政大学出版会 1980年

ジャンル批評の祖となった書物。批評に「科学的方法」を適応し、四季に関する原型的物語のグループ、すなわち喜劇（春）、ロマンス（夏）、悲劇（秋）、諷刺（冬）の4つに文学作品を分類しようとした。

★ロラン・バルト『[S/Z—バルザック『サラジヌ』の構造分析](#)』 沢崎浩平訳 みすず書房 1973年

バルトは『[零度のエクリチュール](#)』『[テキストの快楽](#)』等で作品の読みに新たな扉を開いたが、ここではバルザックの短編小説『[サラジヌ](#)』を具体的に一文一文の分析から鮮やかに読み解いてみせる。

★ウンベルト・エーコ『[物語における読者](#)』 篠原資明訳 青土社 2003年

エーコ『[開かれた作品](#)』（1962年著 篠原資明、和田忠彦訳 青土社 新装版2002年）（編集部注：図書館の所蔵は初版（1984年））の延長上に書かれた、記号論者エーコの重要な著。

★ジェラルド・ジュネット『[パランプセスト—第二次の文学](#)』 和泉涼一訳 水声社 1995年

「一つのテキストは常に別のテキストを隠している」。前記バフチンの哲学的・言語的な対話主義と、構造主義批評を統合する視点をもって生まれた「間テキスト性」の一つの考え方を示した書物。（#ジュネット『[フィギュールI—III](#)』も参照されたい。）

★ジェラルド・プリンス『[物語論の位相—物語の形式と機能](#)』 遠藤健一訳 松柏社叢書—言語科学の冒険 松柏社 1996年

ナラトロジーの二つの系譜をつなぎ、チョムスキー文法を援用するプリンスの新しいナラトロジー。

★ショシャーナ・フェルマン『[狂気と文学的事象](#)』 土田知則訳 水声社 1993年

フーコー、デリタ、ネルヴァル、ランボー、バルザック、フロバール、ラカン、H・ジェイムズのテキストを読みつつ、書くことに内在する「狂気」すなわち「解釈に対して働き続ける抵抗」を浮かび上がらせる。

★アントワヌ・コンパニオン『[文学をめぐる理論と常識](#)』 中地義和、吉川一義訳 岩波書店 2007年

どんな文学理論が、どのように、これまで存在してきたか、そのなし得たことは何か、限界はどこか。フランスにおける文学研究の第一人者が、「文学」、「作者」、「世界」、「読者」、「文体」、「歴史」、「価値」という7つの面から、文学理論を切る。

◆各国文学 作家研究・ジャンル研究

・アンリ・ミットラン『[ゾラと自然主義](#)』 佐藤正年訳 文庫クセジュ 1999年

19世紀自然主義文学最大の作家ゾラの中心的研究者が書いたゾラ論。

- ・ベアトリス・ディディエ『[フランス革命の文学](#)』 小西嘉幸訳 文庫クセジュ 1991年
18世紀をまとめ近代へ一歩を踏み出した決定的な10年間の文学を、18世紀文学研究の第一人者が論じている。
- ・J-L.スタインメッツ『[幻想文学](#)』 中島さおり訳 文庫クセジュ 1993年
フランス幻想文学については、トドロフ『[幻想文学論序説](#)』やP.G.カステックスの論などがあるが、この書は東西古今の幻想文学を鋭く論じた好著。
- ・浦 雅春『[チャーホフ](#)』 岩波新書 2004年
チャーホフの作品と生涯を丁寧に読み解きながら、彼の作品世界の深淵に迫る。作家チャーホフの現代性を浮き彫りにした好著。チャーホフとはどのような作家だったのかを知るのに最適な一冊である。
- ・水野忠夫『[マヤコフスキイ・ノート](#)』 平凡社ライブラリー 2006年
芸術と政治の革命を目指し、37歳でピストル自殺したアヴァンギャルド詩人マヤコフスキイの鮮烈な生涯を描いた歴史的名著。「言葉」を武器に、戦争と革命の時代を駆け抜けたマヤコフスキイの姿を、時代や歴史の流れの中で浮かび上がらせた本書は、20世紀前半のロシア文化全体の見取り図としても出色。
- ・亀山郁夫『[甦るフレーブニコフ](#)』 平凡社ライブラリー 2009年
独自の言語宇宙を築き、放浪生活の果てに孤独な生涯を閉じた未来派詩人フレーブニコフの壮大な夢の軌跡をたどる。死の間際に書かれた「もういちど、もういちど／ぼくは君らのため／星になる」という詩行が心を打つ。
- ・ハミルトン・A・R・ギブ『[アラビア人文学](#)』 井筒豊子訳 講談社学術文庫 1991年
アラビア語の「アダブ」とは、「文学」だけでなく、「礼儀作法」から「教養」まで指す。本書は「文学」を中心に据えながら、アラブ・イスラム世界の知的広がりを紹介。
- ・井筒俊彦『[イスラーム哲学の原像](#)』 岩波新書 1980年
コーランやイスラム法のさらに奥にあるイスラムの考え方について知りたいならば、ぜひ手に取って見るべき一冊。入門書でありながら、非常に厚みのある議論が展開されている。
- ・井筒俊彦『[ロシア的人間](#)』 中公文庫 1988年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
イスラム研究者が、プーシキンからチャーホフまで10人の作家を挙げて語るロシア論。人間

の根源にある宗教性、あるいは東洋的精神という視点からの議論が魅力的。

文学作品（詩・小説・戯曲・評論）

◆インド

- ・『[リグ・ヴェーダ讃歌](#)』 辻 直四郎訳 岩波文庫 1970年
紀元前1000年頃には成立していたとされるインド最古の文献。人為の及ばない事柄を委ねる神々を称える讃歌の集成。
- ・『[アタルヴァ・ヴェーダ讃歌](#)』 辻 直四郎訳 岩波文庫 1979年。
古代インドにおける、いわば「呪い（まじない）」の集成。
- ・『[サンスクリット原典全訳・マヌ法典](#)』 渡瀬信之訳 中公文庫 1991年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）
古代インドの、人間として採るべき道を示した書。ただし、社会的地位が高い男性の視点から記されている。
- ・『[カウティリヤ実利論（上）（下）](#)』 上村勝彦訳 岩波文庫 1984年
古代インドの帝王学書。王国経営に関する諸々が記されている。
- ・林 隆夫『[インドの数学—ゼロの発明](#)』 中公新書 1993年
インドと言えば「数学」でしょ。
- ・『[原典訳マハーバーラタ 第1－8巻](#)』 上村勝彦訳 ちくま学芸文庫 2002/2005年
サンスクリット二大叙事詩のうちの一つ。原典から初の邦訳。訳者急逝のため中断。壮大なドラマのなかにインド文化の原点が描かれている。
- ・上村勝彦『[インド神話—マハーバーラタの神々](#)』 ちくま学芸文庫 2003年
インドの八百万の神々の概説。仏教を通して日本にも伝わった神々の源を知ることできる。
- ・『[バガヴァッド・ギーター](#)』 上村勝彦訳 岩波文庫 1992年
インド精神の精髓と評価される。自分に課せられた義務を全うせよと、勇気を与えてくれる。
- ・上村勝彦『[バガヴァッド・ギーターの世界](#)』 ちくま学芸文庫 2007年
『[バガヴァッド・ギーター](#)』の懇切丁寧な解説書。上村ワールドが展開されている。
- ・『[ナラ王物語—ダマヤンティー姫の数奇な生涯](#)』 鎧 淳訳 岩波文庫 1989年
マハーバーラタに組み込まれている物語。

- ・『[仏弟子の告白—テーラガーター](#)』 中村 元訳 岩波文庫 1982年
出家して仏門に入った男たちの詩の集成。
- ・『[尼僧の告白—テーリーガーター](#)』 中村 元訳 岩波文庫 1982年
出家して仏門に入った女性たちの詩の集成。
- ・『[ジャータカ物語—インドの古いおはなし](#)』 辻 直四郎、渡辺照宏訳 岩波少年文庫 2006年
民話として語り伝えられていた話をブッダの前世物語として構築された説話集の一部。
我々になじみのある話も含む。
- ・カーリダーサ『[シャクンタラー姫](#)』 辻 直四郎訳 岩波文庫 1977年
サンスクリット文学で右に出る者はいないと評価の高いカーリダーサの最高傑作戯曲作品。
ゲーテも絶賛した。
- ・カーリダーサ『[公女マーラヴィカーとアグニミトラ王 他一篇](#)』 大地原 豊訳 岩波文庫 1989年
同じくカーリダーサの作品。
- ・『[カター・サリット・サーガラ](#) インド古典説話集1-4』 岩本 裕訳 岩波文庫 1954/1961年
説話の宝庫インド。世界中に拡がる類話、あなたがどこかで読んで知っている説話が発見できるかも。説話の広がり、まさにグローバル化。
- ・ナーラーヤナ『[ヒトパデーシャー処世の教え](#)』 金倉圓照、北川秀則訳 岩波文庫 1968年
これもサンスクリットの説話集。イソップ童話と類似し、その先後関係も取りざたされた。
- ・『[タゴール詩集 ギーターンジャリ](#)』 渡辺照宏訳 岩波文庫 1977年
ベンガルが生んだ巨匠タゴールの代表作。アジアで初めてノーベル文学賞を受賞した。
- ・ジュンパ・ラヒリ『[停電の夜に](#)』 小川高義訳 新潮文庫 2003年
インド系移民を親に持ち、現在アメリカで英語で執筆する作家のデビュー作。ピューリツァー賞、PEN/ヘミングウェイ賞、ニューヨーカー新人賞を受賞した。
- ・ジュンパ・ラヒリ『[その名にちなんで](#)』 小川高義訳 新潮文庫 2007年
上記作家の初の長編。映画化もされている。移民の文化的アイデンティティを扱う。

◆中国

- ・魯迅『[阿Q正伝・狂人日記 他十二篇](#)』 竹内 好訳 岩波文庫 1981年
歴史的にも文学的にも重要な魯迅の主著を収める。
- ・老舍『[駱駝祥子—らくだのシアーツ](#)』 立間洋介訳 岩波文庫 1980年

北京の作家、老舎が書く、人力車夫の日々。ユーモア、軽妙さと悲劇が交錯する。

★ダイ・シージエ『[バルザックと小さな中国のお針子](#)』 新島 進訳 早川書房 2002年
本の力とは、青春とは... 世界 30 カ国語に訳され、映画化された小説。

◆ロシア

・ゴーゴリ『[死せる魂](#)』 平井 肇、横田瑞穂訳 岩波文庫 1977年
「死んだ農奴」を買って大もうけしようとする男、沸き上がる噂....。おそらく作者の意図とは別に、荒唐無稽なところがある。

・ドストエフスキー『[カラマーゾフの兄弟](#)』 亀山郁夫訳 光文社古典新訳文庫 2006/2007年
名作と言われるものは、やはり面白い。長くてもこれなら読める。

・アフナーシェフ『[ロシア民話集（上・下）](#)』 中村喜和編訳 岩波文庫 1987年
「ロシアのグリム」と称される民俗学者アフナーシェフによる昔話集。ロシア・フォークロアの多彩で豊饒な世界が味わえる。「イワンのばか」などおなじみの作品も。

・プーシキン『[大尉の娘](#)』 神西清訳 岩波文庫 1939/1959年
プガチョフの乱を題材にした傑作歴史活劇。ロシア文学の父プーシキンの深い歴史認識に裏打ちされつつ、恋あり、涙ありの波乱万丈のストーリーは良質のエンターテイメント小説としても楽しめる。はたしてマーシャとグリニョフの運命やいかに!?

・レールモントフ『[現代の英雄](#)』 中村融訳 岩波文庫 1981年
27歳で決闘に倒れた若き天才レールモントフの代表作。優れた知性と強い意志を持ちながら、ニヒリズムに囚われた青年ペチョーリンの魂の遍歴を連作形式で描く。ドストエフスキーやトルストイなどのロシア・リアリズム小説黄金時代の先駆的作品でもある。

・ゴーゴリ『[鼻／外套／査察官](#)』 浦 雅春訳 光文社古典新訳文庫 2006年
朝起きたら鼻がなくなっていた! 荒唐無稽なストーリーの中に風刺と哄笑と妄想を炸裂させた傑作短編『鼻』など3篇を収録。テンポよく言葉を繰り出し、社会にはびこる官僚主義や小市民根性を徹底的に笑いのめした「言葉のテロリスト」ゴーゴリの代表作を、リズム感あふれる名訳で読める。

・ドストエフスキー『[罪と罰](#)』 亀山郁夫訳 光文社古典新訳文庫 2008-2009年（他に新潮文庫、岩波文庫もあり）

「より大きな善」のために殺人の罪を犯した貧しい大学生ラスコーニコフは、敏腕判事

ポルフィーリーにより次第に追い詰められてゆく…。悪とは、罪とは何かを追究した不朽の名作。犯罪者ラスコーリニコフのリアルな心理描写、個性的な脇役たち、緊迫したストーリー展開など、全てにおいて圧倒的な大小説である。

・トルストイ『[幼年時代](#)』 原卓也訳 新潮文庫 1973年（編集部注：図書館の所蔵は単行本『[トルストイ](#)』1巻（原卓也，工藤精一郎訳，新潮社）に収載）

文豪トルストイのデビュー作。幼い子供の心理をみずみずしく繊細に描き出した自伝的中編。『[戦争と平和](#)』や『[アンナ・カレニナ](#)』など、中期以降の「重厚長大」な作品とは一味違ったトルストイの魅力を味わえる。

・トルストイ『[アンナ・カレニナ](#)』 中村 融訳 岩波文庫 1989年（他に光文社古典新訳文庫、新潮文庫もあり）

美しい人妻アンナと青年伯爵ウロンスキーの運命的な恋と破滅を描く。愛と家庭の間で引き裂かれるアンナの苦悩や、彼女を取り巻く多彩な人物群像など、円熟期を迎えたトルストイの筆力は圧巻。冒頭の一文「幸福な家庭はどれも似たものだが、不幸な家庭はいずれもそれぞれに不幸なものである」はあまりにも有名。

・トルストイ『[イワン・イリイチの死／クロイツェル・ソナタ](#)』 望月哲男訳 光文社古典新訳文庫 2006年

死にゆく人間の心理的葛藤を冷徹に描いた『イワン・イリイチの死』。嫉妬のために妻を刺し殺した地主貴族の物語『クロイツェル・ソナタ』。いずれも発表当時に大きな議論を巻き起こした後期トルストイの傑作中編。

・トゥルゲーネフ『[初恋](#)』 沼野恭子訳 光文社古典新訳文庫 2006年

年上の公爵令嬢ジナイーダに恋心を抱く少年ウラジーミル。しかし彼女が愛した相手は…。初恋の甘く切ない記憶と、美しい自然描写が心にしみる。やわらかで清新な訳文も秀逸。

・チャーホフ『[かもめ](#)』 浦 雅春 岩波文庫 2010年

作家志望の青年トレプレフと、その恋人で女優を夢見るニーナ。彼女は人気作家トリゴーリンに心奪われ、彼の元へと走るが…。複雑な人間模様を「脱中心」的な視点で描き、20世紀演劇の扉を開いたチャーホフ戯曲の金字塔。

※他に、帝政末期の没落貴族を描いた『[桜の園](#)』（[湯浅芳子](#)訳、[小野理子](#)訳）（岩波文庫）もおすすめ。登場人物たちのディスコミュニケーションや、現実を直視できず、時代の流れの中でなすすべもなく没落してゆく上流階級の人々の姿は、現代日本に生きる私たちにとって実にアクチュアルである。

・オシップ・マンデリシュターム『[石／エッセイ 対話者について](#)』早川眞理訳 群像社ライブラリー 1998年

言葉の「石」によって詩を建築する孤高の詩人マンデリシュタームの第一詩集。言葉そのものに向き合う彼の作品は、パウル・ツェランなど多くの詩人に影響を与えた。芸術創造における「対話」について語ったエッセイを併録。詳細な訳註と解説がありがたい。

・ミハイル・ブルガーコフ『[巨匠とマルガリータ \(上\) \(下\)](#)』法木綾子訳 群像社ライブラリー 2000年

今なお最もロシア人に愛される20世紀ロシア小説の最高峰。1930年代のモスクワに悪魔ヴォランド一味が現れ、奇怪な力で町中を大混乱に陥れる。精神病院に入れられた作家「巨匠」とマルガリータの愛、巨匠の書いたイエスとピラト総督の物語など、時空を超えたストーリーが絡み合う壮大な作品世界に圧倒される。

・ザミャーチン『[われら](#)』川端香男里訳 岩波文庫 1992年

オーウェル『[1984年](#)』の先駆的作品として知られる反ユートピア小説。全てが管理され、プライバシーや名前さえ持たない未来社会で、一人の女性がクーデターを企てる。彼女に感化された主人公D-503は次第に人としての感情や感性を取り戻してゆくが…。完全管理社会の日常が不吉なほどリアルに描写され戦慄を呼ぶ。

・ヴィクトル・ペレーヴィン『[虫の生活](#)』吉原深和子訳 群像社ライブラリー 1997年

現代ロシアの若者たちに絶大な人気を誇る、ポスト・ソヴィエト文学の旗手ペレーヴィンの奇書。ビジネスマンが、労働者が、若者が、父子が、ある時は虫になり、ある時は人になり、変身を繰り返しながら紡がれるめくるめく物語。

・リュドミラ・ウリツカヤ『[それぞれの少女時代](#)』沼野恭子訳 群像社ライブラリー 2006年

大人の世界へ近づいてゆく少女たちの日常と心の襲を描いた連作短編集。舞台はスターリン時代末期のソ連だが、性への好奇心、嫉妬、恋心、現実への戸惑いなど、女の子の心理や生態はどこでも変わらない。時に残酷なふるまいも見せる彼女たちの姿をありのままに見つめた作者の眼差しは、あくまでも静かで奥深い。

★ヨシフ・ブロツキイ『[私人——ノーベル賞受賞講演——](#)』沼野充義訳 群像社 1996年

国内流刑後、アメリカに亡命した詩人ブロツキイによる1987年のノーベル文学賞受賞講演。「私的」であることに徹する文学の言葉、詩人の言葉の持つ不屈の強さに胸を打たれる。

文学を愛し、けれど文学の「意義」を信じられずにいる全ての人たちにとって必読の書。

【ロシア？】 ※アメリカ移住直前にパリで英語により執筆。出版はアメリカ。

・ナボコフ『[セバスチャン・ナイトの真実の生涯](#)』 富士川義之訳 講談社文芸文庫 1999年

早世した小説家の兄の生涯をたどる語り手の前に、次々と意外な事実が現れる。セバスチャン・ナイトとははたして何者だったのか？ 虚構と現実が入り乱れる中、読者は「真実」の迷宮に引き込まれてゆく。言葉の魔術師ナボコフならではの様々な文学的仕掛けにあふれた作品。

◆フランス領マルティニーク

★ラファエル・コンフィアン『[コーヒーの水](#)』 塚本昌則訳 紀伊国屋書店 1999年
『[クレオール礼賛](#)』の著者がマルティニークの「とるにたらない人々」を書いた傑作。

◆ナイジェリア

★『[アフリカの日々／やし酒飲み](#)』 横山貞子、土屋哲訳 池澤夏樹=個人編集 世界文学全集 河出書房新社 2008年
いわゆる「小説」を読み慣れている人は度肝を抜かれること間違いなし。

◆イタリア

・ダンテ『[神曲 \(全3冊\)](#)』 平川祐弘訳 河出文庫 1992年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
14世紀はじめに書かれた、古典中の古典。ダンテとともに地獄・煉獄・天国をめぐる旅に出よう。

・ペトラルカ『[わが秘密](#)』 近藤恒一訳 岩波文庫 1996年
・ペトラルカ『[無知について](#)』 近藤恒一訳 岩波文庫 2010年
中世イタリアの偉大な詩人・学者の思考に近づきたい。

・ボッカッチョ『[デカメロン](#)』 河島英昭訳 講談社文芸文庫 1999年
ある場所に閉じ込められた男女たちが交代でする面白い話とはどんなものだろうか？

・エドモンド・デ・アミーチス『[クオーレ](#)』 和田忠彦訳 平凡社ライブラリー 2007年。
イタリア児童文学の傑作。「母をたずねて三千里」のお話もここで読める。

★タブッキ『[インド夜想曲](#)』 須賀敦子訳 白水社Uブックス 1993年
失踪した友人を探す主人公がインド各地をめぐるが... そこに現れる様々な光景や人々を通じて、イタリアの作家タブッキ独特の「幻想」的世界があらわれる。この本の中に入って

ゆくことは、小説だけが出現させられる不思議な世界を体験することかもしれない。

・イタリア、人、書物などをめぐる須賀敦子の随筆『[須賀敦子全集](#)』（全8巻、別巻1、河出文庫）も読みたい。

・イタロ・カルヴィーノ『[宿命の交わる城](#)』 河島英昭訳 河出文庫 2004年
タロットカードを並べ、絵柄から語られるお話、交錯する古今東西の物語…。カルヴィーノの、軽快にして巧みな企みが光る。読者が参加させられる不思議な小説『[冬の夜ひとりの旅人が](#)』（脇 巧訳、ちくま文庫）、『[むずかしい愛](#)』（和田忠彦訳、岩波文庫）など、カルヴィーノの世界をめぐりたい。

・ガブリエーレ・ダヌンツィオ『[死の勝利（上）（下）](#)』 野上素一訳 岩波文庫 1991年
耽美主義、デカダンスなどさまざまな言葉で語られるこの作家を、あなたはどうかどう読むだろうか？

・アルベルト・モラヴィア『[倦怠](#)』 河盛好蔵、脇 巧訳 河出文庫 2000年
ネオレアリズモの作家の代表作モラヴィアの代表作の一つ。映画化もされた。

・チェーザレ・パヴェーゼ『[美しい夏](#)』 河島英昭訳 岩波文庫 2006年
・チェーザレ・パヴェーゼ『[故郷](#)』 河島英昭訳 岩波文庫 2003年
ファシズム体制下で書かれ、孤独な二人の女性を描く前者、ネオレアリズモ文学の原点とされる後者。

・プリモ・レーヴィ『[天使の蝶](#)』 関口英子訳 光文社古典新訳文庫 2008年
化学者でもあった作者が書いた、夢と恐怖に照らされる珠玉の短編15篇。アウシュヴィッツ体験者である著者は、『[アウシュヴィッツは終わらない—あるイタリア人生存者の考察](#)』（朝日選書）なども書いている。

◆フランス

・ベディエ編『[トリスタン・イゾー物語](#)』 佐藤輝夫訳 岩波文庫 1985年
ケルト系物語の流れを汲むこの中世の物語は、もともと口承文学。これは19世紀後半にベディエが編集した版である。西洋恋愛小説の原点として、様々な芸術に靈感を与えたこの作品は、三角関係の悲恋を通じて人間の運命や感情を語る傑作。

・マリー・ド・フランス『[十二の恋の物語](#)』 月村辰雄訳 岩波文庫 1988年
レーという韻文形式で書かれた中世の物語。人間と動物が交流し、生と死が交錯する不思議な世界に入っていきたい。

・モンテーニュ『エッセー（全6冊）』 原 二郎訳 岩波文庫 1965/1967年（編集部注：図書館の所蔵は単行本『[モンテーニュ](#)』1-2巻（1973年、筑摩書房）に収載）

おそらく、フランス文学に共通する態度の一つは、人間の本質を探ることでしょう。これはその試みを一生おし進めた作者の断章形式のテキスト。著者が終生加筆修正し続けたこの書は、一読ではきっと味わいつくせません。

- ・ラシーヌ『[フェードル／アンドロマック](#)』 渡辺守章訳 岩波文庫 1993年
- ・ラシーヌ『[ブリタニキウス／ベレニス](#)』 渡辺守章訳 岩波文庫 2008年
フランス古典悲劇の傑作。アレクサンドラン（12音綴）で書かれたラシーヌの文章の美しさを、フランス語を学んだ方はぜひ原文で味わってみたい。
- ・コルネイユ『[嘘つき男・舞台は夢](#)』 岩瀬 孝訳 岩波文庫 2001年
夢と舞台という二つの枠組みを駆使した、コルネイユの型破りな魅力を存分に伝える戯曲『舞台は夢』を収録。
- ・モリエール『[人間ざらい](#)』（新潮文庫）『[タルチュフ](#)』『[ドン・ジュアン](#)』『[守銭奴](#)』『[孤客](#)』『[病は気から](#)』『[いやいやながら医者にされ](#)』『[町人貴族](#)』『[スカパンの悪だくみ](#)』（岩波文庫）はどれも、人間の本性を鋭くつく「喜劇」で、必読。
- ・ヴォルテール『[カンディード 他五篇](#)』 植田裕次訳 岩波文庫 2005年
純真な若者カンディードが故郷を追われ、苦難を経た末に…「わたしたちの畑を耕さなければならぬ il faut cultiver notre jardin」という言葉は何を意味しているのだろうか？
- ・レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『[パリの夜—革命下の民衆](#)』 植田裕次訳 岩波文庫 1988年
パリの町を徘徊する語り手「夜のふくろう」が見たものは…。民衆出身の作者が、口承の語りを書き言葉に結びつけ、激動期のパリを奇怪なほど多面的かつ間近に描き出す。
- ・スタンダール『[パルムの僧院（上）（下）](#)』 生島遼一訳 岩波文庫 1970年
近代小説の祖の一人スタンダールの『パルムの僧院』、『[赤と黒](#)』は、どちらから読むか迷うところ。ファブリスがさわやかに駆け抜ける空間・時間は忘れがたい。
- ・スタンダール『[赤と黒（上）（下）](#)』 桑原武夫、生島 遼一訳 岩波文庫 1958年
材木屋の息子から社会の上層をめざすジュリアン・ソレルの野心と恋を描き、7月革命前夜のフランス社会を諷刺したスタンダールの傑作。
- ・バルザック『[ゴリオ爺さん](#)』 高山鉄男訳 岩波文庫 1997年
バルザックの小説は、今も変わらぬ人間のもろもろの情熱や、近代社会の根や諸問題をすくなく見抜いていて、とにかく面白い。『[人間喜劇](#)』という大きな建物に結びつけられている90以上の小説の中から自分の気に入ったものを見つけてほしいのだが、まずはやはり、父性愛のために没落するゴリオと社会にデビューする法学部の学生ラスチニャックが下宿屋で出会うこの小説からだろうか。『[ゴプセック・毬打つ猫の店](#)』『[知られざる傑作](#)』（岩波文庫）、『[シャベール大佐](#)』（創元ライブラリー）なども。
- ・ユゴー『[レ・ミゼラブル（全4冊）](#)』 豊島与志雄訳 岩波文庫 1987年
誰もが何らかのかたちで読んだ／聞いたことのある、ミリエル司教に出会って悔い改める徒刑囚ジャン・ヴァルジャンの物語。お針子ファンチヌ、その私生児コゼットと、恋人マリウス、悪人テナルディエとその子供たち（一部はパリの悪童）、警官ジャベールなどが登場する。筋が劇的で読ませるのは間違いないが、ユゴーの社会や世界についての思想も書き込

まれている点にも注目。

- ・デュマ・フィス『[椿姫](#)』 西永良成訳 光文社古典新訳文庫 2008年
 19世紀の高級娼婦と地方の上流階級の息子の悲恋を描くこの小説は、語りの仕組みや、18世紀の有名な（ファム・ファタル）小説（『[マノン・レスコー](#)』）とのつながりも巧みだ。ヴェルディによってオペラ化もされた。
- ・テオフィール・ゴーチエ『[死霊の恋・ポンペイ夜話](#)』 田辺貞之助訳 岩波文庫 2002年
 吸血鬼の話にもいろいろあるけれど、これほど幻想的でかわいらしい吸血鬼は、他ではお目にかかれないかもしれない。
- ・メリメ『[カルメン](#)』 杉 捷夫訳 岩波文庫 1960年改版
 まじめな士官ホセの人生を脱線させてしまうカルメンという女は誰なのか... ビゼーのオペラ『カルメン』と原作のメリメの小説とは微妙に内容が違う。
- ・フローベール『[感情教育（上）（下）](#)』 生島遼一訳 岩波文庫 1971年
 19世紀半ば、2月革命の頃のパリを舞台に、青年フレデリックは生き、歩き回り、恋をする。歴史、都市、人間の想いや記憶が交錯する苦くも美しい小説。
 フローベールは他に、『[ボヴァリー夫人](#)』（新潮文庫）、『[紋切型辞典](#)』（岩波文庫）も読みたい。
- ・ゾラ『[ナナ](#)』 川口 篤、古賀 照一訳 新潮文庫 1956年（編集部注：図書館の所蔵は2006年）
 ヴァリエテ座にほとんど全裸であらわれてパリを圧倒した女優、ナナが高級娼婦として男どもを次々破滅させていく... など書いてもこの小説の騒がしさとエネルギー、そこに立ち上がる社会の存在感は言い尽くせない。
- ・ユイスマンス『[さかしま](#)』 澁澤龍彦訳 河出文庫 2002年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）
 閉じこもる、集める、人口の美に傾倒する一世紀末のデカダンス。
- ・『ボードレール全詩集 [1](#)、[2](#)』 阿部良雄訳 ちくま文庫 1998年
 『悪の華』や『パリの憂鬱』、『人工楽園』などを含めたボードレールの鮮烈な作品群を香り高い日本語に訳し、貴重な注釈を加えた文庫版。
- ・『[ランボー全詩集](#)』 宇佐美 斉訳 ちくま文庫 1996年
 ランボー研究者による貴重な注の入った新訳。若い時も年取ってから、ランボーの言葉の放つ力に打たれ、戸惑うだろう。
- ・エドモン・ロスタン『[シラノ・ド・ベルジュラック](#)』 辰野 隆・鈴木信太郎訳 岩波文庫 1983年
 17世紀、すでに『[日月両世界旅行記](#)』（岩波文庫）などを書いた実在人物シラノ・ド・ベルジュラックを主人公に、その弁術と勇氣、恋を語る名作戯曲。物語は強烈な悲恋もの。韻を踏んだ原文を味わい深い日本語にした名訳にも注目したい。

- ・ピエール・ロティ『ラムンチョ』 新庄嘉章訳 岩波文庫 1955/1993年
 人はどうして、どこか似通っていながら、どこか少しずつ違った愛の物語を語り、生きるのだろうか？ 『[アフリカ騎兵](#)』『[お菊さん](#)』（ともに岩波文庫）の作者、海軍士官でもあったロティが、ピレネー山脈の風土と風俗を舞台に描く悲恋物語。
- ・アラン・フルニエ『[グラン・モーヌ](#)』 天沢退二郎訳 岩波文庫 1998年
 フランス文学にはかなくも独特な光を添えた、青春と冒険の物語。読者の記憶のどこかにあったかのような、不安で不思議な懐かしい風景が立ち上る。
- ・プルースト『失われた時を求めて』
 独特の文体、記憶と時間についての思考など、さまざまな意味でフランス文学の大きな山となった長大な小説。日本語で全体を読むとなると、[鈴木道彦訳](#)（集英社文庫）か、井上究一郎訳（ちくま文庫）か。（編集部注：井上究一郎訳の図書館の所蔵は単行本『[プルースト全集](#)』1-10巻（1984-1999年、筑摩書房）に収載）
- ・アポリネール『[アポリネール詩集](#)』 堀口大學訳 新潮文庫 1954年（編集部注：図書館の所蔵は45刷改版（2007年））
 詩を翻訳で読むということ。ここでは、それが日本の詩人の日本語も味わうことだとわかる。
- ・ジッド『[贋金つかい](#)』 山内義雄訳 新潮文庫 1969年（編集部注：図書館の所蔵は単行本『[ジッド](#)』2巻（1970年、新潮社）に収載）
 登場人物が小説の中で同名の小説を書くとうなるのだろうか。斬新な手法を使った名作。
- ・『[ヴァレリー詩集](#)』 鈴木信太郎訳 岩波文庫 1968年
 「風立ちぬ… 生きようと努めねばならない le vent se lève, il faut tenter de vivre.」の詩句で有名な「海辺の墓地」を含む『[若きパルク](#)』などの詩集を収録。
- ・『[ヴァレリー・セレクション（上）（下）](#)』 平凡社ライブラリー 2005年
 文学・芸術・文明、さまざまな対象に明晰な筆を向けたヴァレリーの知性と精神を、年代ごとに老いながら読む。
- ・モーリアック『[テレーズ・デスケルウ](#)』 遠藤周作訳 講談社学芸文庫 1997年
 「美しい秘密に満ち、暗い秘密を心にもつ人間以外について、ぼくは何も言うことはできない」。ボルドー地方の風土の手触り、家の重みをとおして、一人の女性の「罪」を見つめる作品。
- ・サン・テグジュペリ『[人間の土地](#)』 堀口大學訳 新潮文庫 1955年（編集部注：図書館の所蔵は改版（1998年））
 『[星の王子さま](#)』で知られるサン・テグジュペリは飛行士だった。その体験をもとに書かれたこの本は、まちがいなく、読者に死と生、地球と人間、友情などについて根底から考え直させてくれる本である。『[夜間飛行](#)』（堀口訳、新潮文庫）もすばらしい。

- ・カミュ『[カリギュラ](#)』 岩切正一郎訳 ハヤカワ演劇文庫 2008年
カミュは『[異邦人](#)』も『[ペスト](#)』も有名だが、戯曲もぜひ。
- ・アンドレ・ブルトン『[ナジャ](#)』 巖谷國士訳 白水Uブックス 2003年（岩波文庫にもあり）
都市、写真、謎めいた女性…。『[シュルレアリスム宣言](#)』のブルトンによる、不意をうつ、しかも符合に満ちた、問題作。
- ・レーモン・クノー『[地下鉄のザジ](#)』 生田耕作訳 中公文庫 1974年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）
地下鉄に乗るのを楽しみにパリにやってきたザジは…。軽妙で言葉のスリルに満ちたクノーの世界が繰り広げられる。
- ・アゴタ・クリストフ『[悪童日記](#)』 堀 茂樹訳 ハヤカワepi文庫 （編集部注：図書館の所蔵は単行本）
厳しい日常をたくましく生き抜く引き裂きがたい双子の兄弟は…。戦争、暴力、性を生きつつ、それをどこか乾いたヴィジョンで語るこの本は、まちがいなく、あたたかく、残酷で、衝撃的な体験を読者に用意している。
- ・クンデラ『[存在の耐えられない軽さ](#)』 千野栄一訳 集英社文庫 1998年 （編集部注：図書館の所蔵は単行本）
チェコ出身、パリに亡命した作家クンデラによる、現代小説の傑作。ニーチェの永遠回帰やベートーヴェンの楽句を引用しながら、軽さと重さというテーマを軸に「愛」を問い、「プラハの春」前後のチェコ社会、そこにおける人間存在を書く。心と身体、キッシュ、偶然など、クンデラ的テーマが、ポリフォニックに奏でられている。
河出書房新社から出ている [西永良成訳](#)は、著者が手を入れた決定版とされるフランス語版からの新訳。
- ・ル・クレジオ『[海を見たことがなかった少年／モンドほか少年たちの物語](#)』 豊崎光一、佐藤領時訳 集英社文庫 1988年 （編集部注：図書館の所蔵は単行本）
ル・クレジオの世界に入っていく人には、『[砂漠](#)』（河出書房新社）などをまず勧めるべきかもしれない。でも、この子供たちの物語もまた、ル・クレジオの思想やその小説世界独特の光や色彩をはらんでいて、一度手に取ったらいつもそこに戻りたくなる何かを持っている。文庫では他に『[大洪水](#)』（望月芳郎訳、河出文庫）などがある。

◆スペイン

- ・セルバンテス『[ドン・キホーテ（全6冊）](#)』 牛島信明訳 岩波文庫 2001年
騎士道物語を読んで自分を伝説の騎士と思い込んだ主人公が、貧相な馬に乗り、従者サンチョ・パンサを連れて旅に出る…。17世紀初頭に書かれたこの作品は、以後さまざまな解釈にさらされてきたが、現在でも多様な読みを誘うのでは。

- ・ロペ・デ・ベガ『[オルメードの騎士](#)』 長南 実訳 岩波文庫 2007年
スペイン黄金世紀の怪しい悲恋とはどんなもの？
- ・『[スペイン幻想小説傑作集](#)』 東谷穎人編 白水Uブックス 1992年
スペイン文学の幻想、怪奇、非日常の世界には独特の味がある。12人による傑作が並ぶ。
- ・『[笑いの騎士団—スペイン・ユーモア文学傑作選](#)』 東谷穎人編 白水Uブックス 1996年
スペイン文学の諷刺・笑いの味もぜひ味わってみたい。

◆ポルトガル

- ・『[ペソア詩集](#)』 澤田 直訳 海外詩文庫 思潮社 2008年
「ぼくらのなかには 無数のものが生きている／自分が思い 感じるとき ぼくにはわからない／感じ 思っているのは／誰なのか／自分とは 感覚や思念の／劇場にすぎない」
一つの名前に束ねられない謎めいた詩人の、三つの異名と本名名義の作品を収録。

◆デンマーク

- ・イサク・ディーネセン『[バベットの晩餐会](#)』 榊田啓介訳 ちくま文庫 1992年
ユトランド半島の寒村を舞台に、短編ながら、さまざまな人の生や夢、フランス社会の変遷を背後に抱え、人間の芯を見据えた傑作。同じ作者の『[アフリカの日々](#)』（映画『愛と悲しみの果て』原作）も、素晴らしい。
- ・アンデルセン『[完訳アンデルセン童話集 全7冊](#)』 大畑末吉訳 岩波文庫 1984年改版
誰でも読んだことのある童話だからこそ、また読んでみるのが怖いような、面白いような...
アンデルセンの童話は他にも文庫で出ている。

◆イギリス

- ・『[シェイクスピア全集](#)』 小田島雄志訳 白水Uブックス 1983年 （編集部注：図書館の所蔵は単行本）
- ・『[シェイクスピア全集](#)』 [1巻](#)～ 松岡和子訳 ちくま文庫 1996年一 （編集部注：全集全体の閲覧は、請求記号「A/9K-8/S527-11/*」にてOPACを検索のこと）

多くの影響を与え続けて色褪せない戯曲の名作。

- ・ヴァージニア・ウルフ『[灯台へ](#)』 御輿哲也訳 岩波文庫 2004年
スコットランドの島を舞台に、灯台への旅を思い描く家族、第一次世界大戦を挟む時間の流れ... 「意識の流れ」を探求した女性作家の美しく張りつめた作品。ウルフ作品は他にも文庫で読める。『[波](#)』『[ダロウェイ夫人](#)』（角川文庫）、『[オーランドー](#)』『[ヴァージニア・ウルフ短編集](#)』（ちくま文庫）、（角川文庫）など... （編集部注：『波』の図書館の所蔵は単行本）

◆アイルランド

・ジョイス『[ダブリンの人びと](#)』 米本義孝訳 ちくま文庫 2008年
20世紀初頭、ジョイスの15の短編集。ダブリン市民の姿をたんと描きながら味わい深い傑作を、注釈や解説、地図でさらに味わいやすくした版。

・フランク・オコナー『[フランク・オコナー短編集](#)』 阿部公彦訳 岩波文庫 2008年
アイルランドの人々の姿を描きつつ、ユーモアもあり、ミステリアスな、短編のさまざまな味を感じさせてくれる。

◆カナダ

・ラファティ『[九百人のお祖母さん](#)』 浅倉久志訳 ハヤカワ文庫SF 1988年
笑いの種類を論じることはなかなか難しい。まちがいなく笑わせてくれるこの短編集の面白さを知ったら、ぜひ誰かに言ってみてほしい。

★アリストア・マクラウド『[冬の犬](#)』 中野恵津子訳 新潮クレスト 2004年
厳しい風土の中に紡がれる、珠玉の物語の数々。

◆アメリカ合衆国

・フォークナー『[響きと怒り](#)』 高橋正雄訳 講談社文芸文庫 1997年
フォークナーが作った架空の町、ミシシッピ州ヨクナパトーフア郡ジェファソンに生きる南部の名門コンプソン一家は因襲と古い伝統の中でと没落していく。この作品は、4章からなり、4つの違った視点から物事が語られる。連作「ヨクナパトーフア・サーガ」の中でも重要な作品。

・エドガー・アラン・ポー『[黒猫・アッシャー家の崩壊](#)』『[モルグ街の殺人・黄金虫](#)』 巽孝之訳 新潮文庫 2009年
不安と不気味さ、独特の密やかさ、緊迫感... ポー独特の世界はぜったいにのぞいてみる必要がある。どこかにいつもあるようで、そこ以外にはないように思えるから。

・ナボコフ『[ロリータ](#)』 若島 正訳 新潮文庫 2006年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
奥深く謎めいたこの小説、何度も読んでみるしかない。

◆中南米

・ガルシア＝マルケス『[予告された殺人の記録](#)』 野谷文昭訳 新潮文庫 1997年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
コロンビアのノーベル賞作家によるこの名作を語る方法はいろいろあるだろう。殺人という一つの出来事を語る中に、共同体の亀裂や人間の矛盾が入り組んで重なり合う作品...。しかし、読んで実際にこの遠近感を感じてほしい。同作家の『[幸福な無名時代](#)』『[エレンディア](#)』(ちくま文庫)、『[族長の秋](#)』(集英社文庫)なども。(編集部注：『族長の秋』の図書館の所蔵は単行本)

- ・ボルヘス『[伝奇集](#)』 鼓 直訳 岩波文庫 1993年

この短編集の中でも、宇宙の隠喩としての図書館が語られる「バベルの図書館」はあまりにも有名。名文のつまった短編集『[砂の本](#)』（集英社文庫）、メタフィクションの傑作『[不死の人](#)』（白水Uブックス）もいい。

- ・カルペンティエール『[バロック協奏曲](#)』 鼓 直訳 サンリオ SF 文庫 1979年

キューバの作家カルペンティエールは音楽に造詣が深かった。この作家の作品としては、やはりロシア革命・スペイン内戦からキューバ革命までを描く壮大な

- ★『[春の祭典](#)』 柳原孝敦訳 国書刊行会 2001年 も読みたい。

- ★ジコ・ブアルキ『[ブダペスト](#)』 武田千香訳 白水社 2006年

リオとブタペスト、表の作者と裏のライター... 境界を行き来し、彷徨い、主人公が行き着く先は？

ボサノバの歌手・作曲／作詩家でもあり、ブラジルの知識人である作者の言葉のリズムにのって、あなたも意外なところに連れていかれるかも。

- ★ロベルト・ボラーニョ『[通話](#)』 松本健二訳 (ExLibris) 白水社 2009年

チリの作家ボラーニョの初期傑作短編集。どこから来るのかよくわからない恐怖、名もない人々の声を聴こう。

◆チェコ

- ・カフカ『[変身](#)』 高橋義孝訳 新潮文庫 1985年改版

朝起きたら... あなたはこの突然の変身の物語をどう読むだろうか。

- ・クンデラ：(フランスに帰化：フランスの項) を参照。

◆ハンガリー

- ・アゴタ・クリストフ：(フランスに帰化：フランスの項) を参照。

◆ドイツ

- ・トーマス・マン『[トニオ・クレーゲル／ヴェニスに死す](#)』 高橋義孝訳 新潮文庫 1962年
(編集部注：図書館の所蔵は単行本)

芸術家の孤独な魂、老人の少年に対する愛を描く二作。

- ・ゲーテ『[ファウスト \(第1部\) \(第2部\)](#)』 相良守峯訳 岩波文庫 1958年

ファウスト伝説を下敷きにゲーテがほぼ一生かけて実現した大作。学問の無力に絶望したファウスト博士は悪魔メフィストとの契約で、魂の服従を条件に、世界のすべてを知ろうとする... 周辺や後世にあまりにも多大な影響を与えた作品。

・『[黄金の壺／マドモワゼル・ド・スキュデリ](#)』 大島かおり訳 光文社古典新訳文庫 2009年
 ホフマンの幻想小説はどれも奇怪で面白く、ドイツのみでなく周辺のロマン派芸術の空気を理解するためにも欠かせないのだが、下の小説も中古でしか手に入らないため、この新訳を挙げておく。

・ホフマン『[牡猫ムルの人生観（上）（下）](#)』 秋山六郎兵衛訳 岩波文庫 1956／1957年
 石丸静雄訳 角川文庫 1989年

（編集部注：図書館の所蔵は[単行本（深田甫訳, 1972年, 創土社）](#)）

シューマンのピアノ曲『[クライスレリアーナ](#)』に、エピソードの面でも構造上も影響を与えたと言われるこの小説は、音楽に憑かれたクライスラーの物語と、文章を綴れる猫ムルの記録を交互に組み合わせた、不思議な、魅力的な書。

・ヘルマン・ヘッセ『[知と愛](#)』 高橋健二訳 新潮文庫 1959年 （編集部注：図書館の所蔵は単行本）

ヘッセの作品のどれが読者の心に響くかはわからないが、知と愛を生きる二人の登場人物をもつこの小説もぜひ。

・『[ベンヤミン・コレクション](#)』 ちくま学芸文庫

〈1〉近代の意味

〈2〉エッセイの思想

〈3〉記憶への旅

〈4〉批評の瞬間

〈5〉思考のスペクトル

哲学・言語・芸術・写真・歴史など多岐にわたる対象を分析した 20 世紀の突出した批評家・文章家であるベンヤミンの主要なテキストをまとめたシリーズ。

・『[ブレヒト詩集](#)』 野村 修訳 世界現代詩文庫 土曜美術社 2000年

ブレヒトは戯曲も読みたいが、ここではあえてストレートに訴えてくるこの詩集を。

・シャミツソー『[影をなくした男](#)』 池内 紀訳 岩波文庫 1985年

文学の中で影をなくす男はこの小説の主人公だけではないが、シュミレールは「幸運の手袋」と引き換えになくして…

・パトリス・ジュースキント『[香水](#)』 池内 紀訳 文春文庫 2003年

南仏を舞台に、匂いがなく匂いを作る男の物語をサスペンスタッチもまじえて書いたこの小説は、歴史家アラン・コルバンによる『[にょいひの歴史](#)』に想を得ているとも言われる——なるほど、匂いと香りの話は奥が深い。

・『[ニーベルンゲン之歌](#)』（上・下） 岩波文庫

ゲルマン民族の英雄叙事詩。ドイツ文学史のなかで最初に語られる重要な作品のうちの筆頭にあげられるだろう。キリスト教的秩序が支配する社会でありながら、それを最終的には怒涛のようにおしやってしまうゲルマンの諸部族の慣習と世界観が圧倒的。叙事詩として語

られる世界の中に強く引き込まれる。

- ・カント『[啓蒙とは何か](#)』 岩波文庫

18世紀の啓蒙主義のなかで、ドイツ的な性格を際立たせている。18世紀ドイツの思想的特質を捉える上で、必読の書物の一つ。

- ・ゲーテ『[若きウェルテルの悩み](#)』 岩波文庫

カントの『[啓蒙とは何か](#)』とほぼ同時代（10年前）に出版された書物だが、いわゆる「疾風怒濤（シュトゥルム・ウント・ドラング）」の時代を代表する作品として、啓蒙的理性の対極にある。単に物語の筋を追うのではなく、ここでありありと描き出されている18世紀後半の市民生活や宮廷生活の姿、当時の思想的潮流、書簡体小説という語りの形式、そして言葉そのもの（翻訳では難しいが）をぜひ読み取ってほしい。

- ・ゲーテ『[親和力](#)』 岩波文庫

ゲーテの作品としては、なんとと言っても『[ウェルテル](#)』と『[ファウスト](#)』が有名だが、この長編小説は、人間関係や物語の構築の緻密さにおいてずば抜けた作品とあってよい。是非とも読んでほしい作品の一つ。

- ・クライスト『[チリの地震—クライスト短篇集](#)』 河出文庫 1996年（編集部注：図書館の所蔵は単行本）

ハインリヒ・フォン・クライストは、ゲーテより30年近く後に生まれているが、彼の生涯はゲーテの生涯の期間のうちにおさまっている。きわめて秀逸な短編小説・戯曲を残し、非常に高く評価されている作家の一人。この短編集には含まれていないが、『[ミヒヤエル・コールハース](#)』も勧めたい。

- ・『[ドイツ幻想小説傑作選 ロマン派の森から](#)』 今泉文子編 ちくま文庫 2010年

このアンソロジーには、テーク「金髪のエックベルト」、シャミッソー「アーデルベルトの寓話」、アーヒム・フォン・アルニム「アラビアの女予言者メリュック・マリア・ブランヴィル」、アイヒェンドルフ「大理石像」、ホフマン「ファールンの鉱山」などのドイツ・ロマン派の作品が収録されている。ドイツ・ロマン派の文学においては、これらの作品に見られるような怪奇幻想性が一つの重要な特質となっている。単純に読んで面白いが、そういったロマン派の側面を知るためにも最適な作品集。

- ・E.T.A.ホフマン『[ホフマン短篇集](#)』 池内 紀訳 岩波文庫

この短編集のなかでも「砂男」はとくに有名。ホフマンは、ロマン派の怪奇幻想的特質と

いう点では、もっとも典型的な作家のひとりといってよい。

- ・シャミッソー『[影をなくした男](#)』 岩波文庫

フランスとドイツのはざまに生きた作者の自伝的な要素もあわせもつ寓話的な小説。この作品も、ドイツ・ロマン派の幻想的特質を顕著に示している。

- ★『[ドイツ短篇 24](#)』 集英社 1971年

ドイツ文学の中のとくに重要な短編小説を集めた本としてお勧め。なかでも、ビューヒナー『レンツ』、シュニッツラー『死人に口なし』はとくに読むべき作品。戦後文学も含む。

- ・ニーチェ『[ツァラトゥストラはこう言った](#)』 岩波文庫

後期のニーチェの最も重要な著作の一つ。もちろん、単にニーチェの執筆活動の中での重要性というだけでなく、一九世紀の市民的価値観・キリスト教的道徳というパラダイムに対する根本的なアンチテーゼを、概念の言葉によってではなく、比喩の言葉によって提示した著作として、思想史の中でとりわけ重要な位置を占める。

- ・フロイト『[夢判断](#)』 新潮文庫 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)

「夢」は「現実」に対置されるとき一般的に価値のないものとみなされるが、フロイトは、いわば氷山の海面下の部分のように、これまで人間の精神活動全体のなかで概念的考察の対象とされてこなかった無意識の領域を、夢の分析を通じて明らかにしようと試みた。1899年に出版されたこの書物は、20世紀の人間観の大きな転換にかかわる重要な礎石の一つとなっている。

- ・フロイト『[自我論集](#)』 竹田青嗣編、中山 元訳 ちくま学芸文庫 1996年。

フロイトを知るためには、概説書を読むだけでなく、まずはこの本に収録されているような「快感原則の彼岸」、「自我とエス」といったとくに重要な短いテキストを読むことを勧めたい。

- ・ホフマンスタール『[チャンドス卿の手紙 他十篇](#)』 桧山哲彦訳 岩波文庫

世紀転換期ウィーンの作家ホフマンスタールは、ドイツ語圏の作家のなかでもとりわけ卓越した言葉の持ち主。「薔薇の騎士」をはじめとする R.シュトラウスのオペラの台本を執筆した作者としても知られる。標題の「チャンドス卿の手紙」は、世紀転換期における言語危機の問題について触れるとき、必ず言及されるテキスト。

- ★カール・クラウス『[人類最期の日々](#)』 池内 紀訳 法政大学出版局

カール・クラウスは、ホフマンスタールと同年生まれの世紀転換期ウィーンの批評家・作家。言葉に対する強い愛情と極度の要求、そして同時代の文化・社会に対する痛烈な諷刺によって、数多くの敵対者を作り出すとともに、同時代人の知識人にとっては畏敬・畏怖の対象となった。『人類最期の日々』は、第一次世界大戦のさまざまな状況を、実際の新聞の言葉をモンタージュ的に使うことにより、徹底的に諷刺的に描き出す壮大な戯曲。

・カフカ『[城](#)』、『[審判](#)』、『[変身](#)』 岩波文庫等

カフカの文学は、ドイツ文学に限らず、20世紀の文学全体のなかで不気味にそびえたっている。さまざまな世界の歪みをとめない、いつまでたっても目標地点に達することのない彼の文学の異様さは、数多くの解釈の方向を生み出してきたが、まずはテキストそのものに自分自身で触れてほしい。

・『[カフカ短篇集](#)』 池内 紀編訳 岩波文庫

カフカにはごく短いすぐれた小説が多い。この「短編集」には、「掟の門」、「判決」、「田舎医者」、「流刑地にて」、「万里の長城」などの傑出した異色の作品が並んでいる。

・トーマス・マン『[ブッデンブローク家の人々](#)』

トーマス・マンは、一九世紀に形成されてきた市民的価値観がいったん崩壊にさらされる第一次世界大戦後のワイマール期においても、彼の時代との相克のなかで、きわめて高度な教養市民的また芸術家的価値を保持しつつけた作家である。一九〇一年に出版された初期の代表作『ブッデンブローク家の人々』は、大河ドラマ的にある富裕な一家の緩やかな没落を描き出しているが、この小説ほど19世紀的なドイツの教養市民の姿をありありと見せてくれるものは他にはないだろう。

・『[トーニオ・クレーガー](#) 他一篇』 平野卿子訳 河出文庫

初期の美しい作品。この小説でも、市民性と芸術的特質という二項対立が大きな軸となっているが、まずは作品の美しい世界を感じ取ってほしい。この文庫本に併録されている「マリオと魔術師」、ワイマール時代における大衆行動の非合理主義特質について語る際に必ず言及される重要な作品。

(編集部注：2作品とも、図書館の所蔵は単行本『[トーマス・マン](#)』(森川俊夫、村田経和訳、1966年、三修社)に収載)

・『[ヴェニスに死す](#)』 岩波文庫

いかにもトーマス・マン的な、息の長くきわめて格調高い文体で語られる。ここでも市民性と芸術という二項対立の図式が一貫しているが、主人公の最期の姿に見られるように、決

して「芸術」が手放しで称揚されるわけではない。トーマス・マンの主要な作品はしばしば映画化されているが、ヴィスコンティによるこの小説の映画は必見。

・『[魔の山](#)』

ごく平凡な主人公が、結核療養所という「魔の山」にのぼり、そこでさまざまな経験をしたのち、もとの世界に降りてくる。この「魔の山」で主人公ハンス・カストルプが経験することは、この作品が出版された 1924 年という時点におけるドイツの社会的・文化的状況にまさに重ね合わさっており、20 世紀初頭の高度な教養的市民の世界であるとともに、そのカオス的解体の現場でもある。

・ヘルマン・ヘッセ『[デミアン](#)』 岩波文庫

第一次世界大戦の直後、1919 年に当初匿名で出版されたこの小説は、当時の精神風土にまさにあてはまるものとして、熱狂的な読者を獲得した。幼年時代から青年時代にいたる主人公の精神的格闘の過程をみずみずしく描き出すこの小説は、みなさん自身の精神的成長の過程にも重なるところが多いのではないだろうか。カインとアベルの新たな解釈、ユングの影響を受けた夢分析など、引きつけられるエピソードが多い。

★アルフレート・デーブリー『[ベルリン・アレクサンダー広場](#)』 河出書房新社

ワイマール時代の大都市ベルリンにおける文化的・社会的状況を生き生きと描き出すとともに、ワイマール時代における小説のひとつの新しいかたちを提示した作品。ベルリン方言により、犯罪者・下層の人たち・売春婦など、大都市のなかの裏側の世界が、感情を排した叙述と構成により描き出される。

・ベルトルト・ブレヒト『[三文オペラ](#)』 岩波文庫

ブレヒトのもっとも有名な戯曲。「異化」によって物語世界への感情移入を戦略的に排除し、観客に自分自身の直面する社会的・政治的状況に向かわせようとする「叙事的演劇」の作品ではあるものの、この作品は単純に楽しい。ヴァイルの音楽もいかにもヴァイマール時代のキャバレー音楽を思わせる楽しいものだが、テキスト・音楽と分割するのではなく、是非とも舞台として見てほしい作品。

★エリアス・カネッティ『[眩暈](#)』 (1935)

1981 年にノーベル文学賞を受賞したカネッティの代表作。肥大化した精神性ともいえるべき中国学教授と、彼と結婚した家政婦の抗争をめぐる、奇妙なユーモアにみちた壮大な作品世界。

・ヴァルター・ベンヤミン『[ベンヤミン・アンソロジー](#)』山口裕之編訳 河出文庫 2011年
現代の芸術のあり方、メディアを考える上で必読の「技術的複製可能性の時代の芸術作品」(第3稿)、「暴力の批判的検討」、「歴史の概念について」など、ベンヤミンを知るためにもっとも重要なテキストがコンパクトに集められたアンソロジー。

・ギュンター・グラス『[ブリキの太鼓1～3](#)』高本研一訳 集英社文庫 (編集部注:図書館の所蔵は単行本)

3歳の時、自らの意思で成長を止めた主人公オスカル(語り手としては精神病院の患者)の視点から、ナチズムの台頭、第二次世界大戦の勃発と終戦の時代のダンツィヒが、猥雑さをむき出しにして、諷刺的に描き出される。歴史的事実と荒唐無稽なファンタジーが交錯する物語世界。シュレーンドルフによる映画も合わせてみてほしい。ここにみられる小市民性への批判は、ドイツの戦後文学が取り組んだ重要な主題のひとつ。

★イルゼ・アイヒンガー『[縛られた男](#)』 同学社

この短編小説のなかに含まれる「鏡物語」は、ドイツ語で書かれた数少ない二人称小説の一つとして知られる。悲しくも美しい世界が、巧妙で不思議な構成と語りによって作り上げられている。

★ユードイット・ヘルマン『[夏の家、その後](#)』 松永美穂訳 河出書房新社

現代ドイツの作家のなかでも、とくに注目を集めている作家のひとり。美しい言葉と語りをもった短編集。

◆オーストリア

・ミュージル『[三人の女・黒つぐみ](#)』川村二郎訳 岩波文庫 1991年
大作『[特性のない男](#)』に取りかかれずにいる方には、まずこれと『[寄宿生テルレスの混乱](#)』(光文社古典新訳文庫)を。

・エルフリーデ・イエリネク『[レストハウス、あるいは女はみんなこうしたもの](#)』谷川道子訳(ドイツ現代戯曲選)論創社 2007年

ノーベル賞作家イエリネクの作品は、映画化された小説『[ピアニスト](#)』が特に有名かもしれないが、その戯曲は冒険に満ちていてすばらしい。平易に読めるとは言い難いが、「引用の織物」でありながらまったく新しい世界を作り上げている。

◆日本

日本文学から何冊かを選ぶことはとても難しい。ここでは、東京外国語大学にゆかりの深い作家・詩人何人かを紹介しておく。

- ・島田雅彦『[彗星の住人](#)』『[美しい魂](#)』『[エトロフの恋](#)』 新潮文庫 2007年 (編集部注：図書館の所蔵は単行本)
「無限カノン」三部作。作者がいう、「考えられる限り、もっとも危険で、甘美で、それを描くことが難しい恋」とはどのようなものなのだろう？
- ・永井荷風『[瀬東綺譚](#)』 岩波文庫 1991年
町は変わり、町を歩く小説はいろいろあるけれど、荷風について風景の中に入って行くと...
- ・中原中也『[中原中也詩集](#)』 新潮文庫 2000年
夭折の詩人の言葉の力を凝縮した一冊。